

Other Historical Material on “Ashibeya” at Wakanoura

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-10-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西本, 真一, 西本, 直子 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/285

和歌の浦「あしべ屋」を巡るその他の史料

Other Historical Material on “Ashibeya” at Wakanoura

西本真一*
Shinichi Nishimoto

西本直子†
Naoko Nishimoto

要旨

あしべ屋に関する新たな資料が発見された。特に明治時代初期に属する刊行書「国華余芳」の発見は貴重である。地上から2階へ直接上がる階段がどの時代に撤去されたのか、示唆する広告も探し出すことができた。また、あしべ屋妹背別荘の奥座敷については他所から移築されたことを暗示する痕跡が残り、この移築がいつおこなわれたかが不明であったが、その年代の幅を狭めることもできた。

1、前言

和歌山市和歌の浦に残るあしべ屋妹背別荘は、かつて明治・大正時代にわたって栄えた会席旅館あしべ屋の最上の客をもてなす場として用いられたことが分かっているが、本館や別館が取り壊された今、詳しい来歴は不明であった。前稿¹における考察によって、あしべ屋の施設は3つに大きく分けられ、第2期目に関してはさらにふたつに区分されよう(図1)。本稿ではこの区分に従い、新たに渉猟された史料について紹介をおこないたい。

1 拙稿「和歌浦『あしべ屋別荘』と夏目漱石」、武蔵野大学環境研究所紀要2(平成25[2013]年)、pp.77-93;「和歌の浦『あしべ屋』の増改築の過程」、同紀要3(平成26[2014]年)、pp.99-115。

*工学部非常勤講師(建築デザイン学科) †工学部非常勤講師(建築デザイン学科)

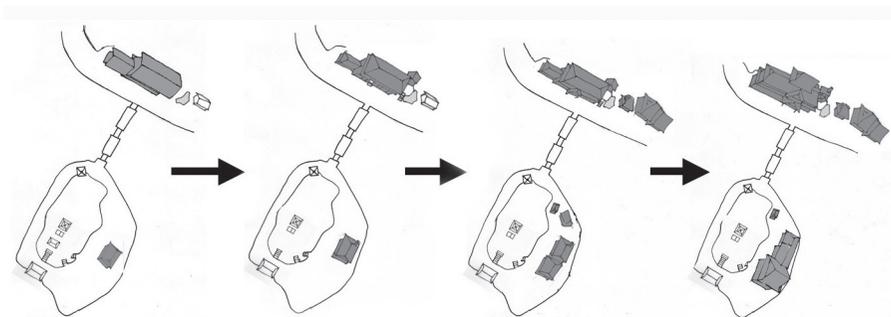


図1：あしべ屋の変遷。左から右に向かって第1期、第2期A、第2期B、第3期。

2、「国華余芳」

第1期の姿を具体的に伝える資料は乏しい。鶏卵紙写真の「紀伊和歌声部家」があるばかりとなっていた²。しかし「国華余芳」(明治13 [1880] 年)に、あしべ屋の遠望が含まれている点が明らかとなった(図2)。



図2：「国華余芳 和歌浦塩濱」、あしべ屋の位置を矢印で示す。

2 「和歌の浦『あしべ屋』の増改築の過程」、p.107。

当該の写真は和歌の浦最古の写真と言われる³ものであって、一般向けの本に書誌がないまま転載されたことがある⁴。この写真は、撮影者や撮影日、さらには撮影場所までもが判明している点で稀有であり、注目される⁵。撮影者の日記から、この写真が明治12（1879）年7月1日に撮影されたことが知られるが、大判の鶏卵紙写真に焼き付けていることはさらに重要で、この写真を拡大してみると、不明瞭ではあるが、あしべ屋の姿が確かに写っているように思われる（図3）。その形姿は「紀伊和歌芦部家」と似ており、明治12（1879）年にはあしべ屋の第1期がここにあったことが推察される。

だが明治10年代の道中記などをみるならば、旅館としてのあしべ屋の記述に出会うことは難しく、代わりに和歌の浦で頻出する宿屋は「米屋栄蔵」で、これは後の旅館「米栄」を指すように思われる⁶。米屋栄蔵は弘化3（1846）年の「丙午紀行」にも登場し⁷、江戸時代末期から続く旅籠屋であったらしい。

なお、「足辺の茶屋」については明治7（1874）年の旅日記でうかがわれる⁸。



図3：拡大図。

- 3 藤本清二郎「和歌の浦百景：古写真でみる『名勝』の歴史」、東方出版、平成5（1993）年、p.102。
- 4 「和歌山県の昭和史：別冊『一億人の昭和史』」、毎日新聞社、昭和57（1982）年、p.25。
- 5 益田清「得能良介巡回日記：明治12年文化財歴訪の旅」、私家本、平成8（1996）年、p.60。
- 6 「伊勢金毘羅道中講定宿帳」、今井金吾監修「道中記集成」43、大空社、平成9（1997）年、p.49。今井によれば、「その配色から見て、明治の始め、10年代くらいの刷りであろう」と判断されている。同書、pp.382-83。
- 7 佐藤脩亮「丙午紀行」天、私家本、大正11（1922）年、p.79。
- 8 森川昭「明治七年の旅」、帝京大学文学部紀要「日本文化学」41（平成22〔2010〕年）、p.88。

3、中山昇三「紀伊国旅の友」

あしべ屋の広告はさまざまな本に掲載されているが、この本の広告には地上から直接2階へ登る階段がいったん描かれたものの、それを抹消した痕跡が残っている点で珍しい⁹。赤い紙の上に印刷されており、拡大図とともに示す(図4、5)。

階段はこの時期に撤去されたと考えられることができるであろう。

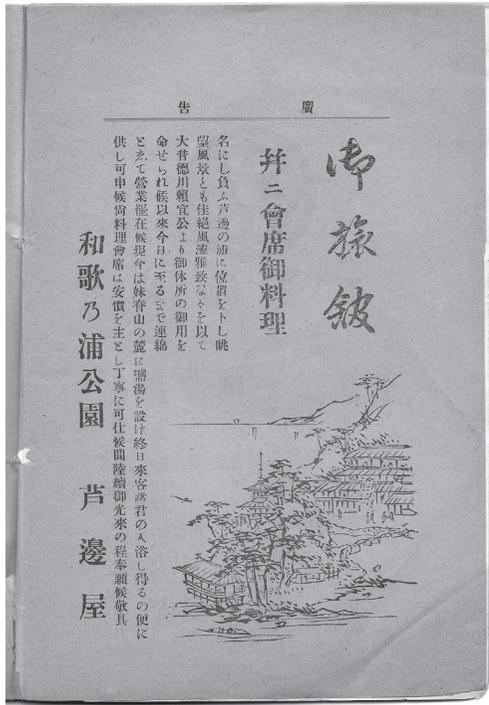


図4：あしべ屋広告。



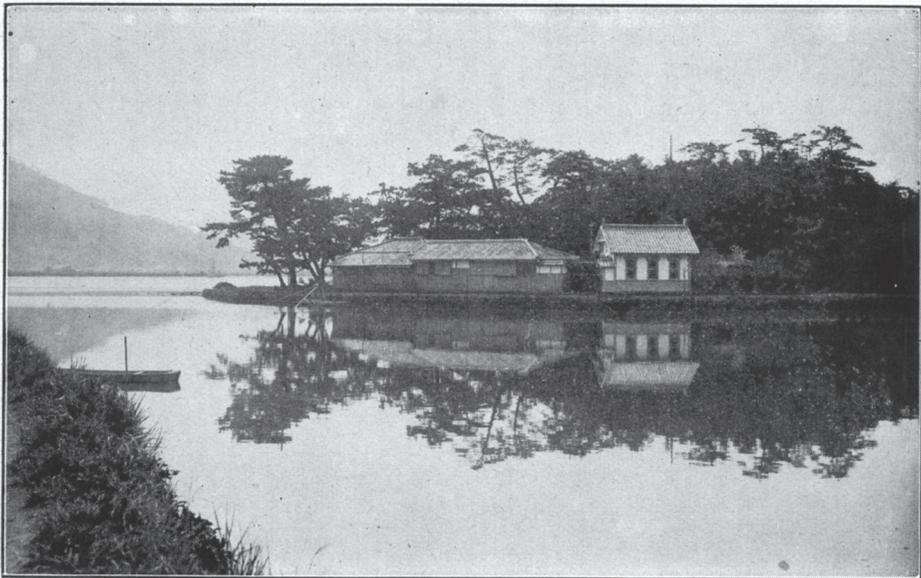
図5：拡大図。

4、土井林之助「和歌浦遊覧の友」

この本は大正2(1913)年に初版が出され、大正6(1917)年に再版されている。あしべ屋の広告はどちらの版にも見られるが、妹背別荘の奥座敷が初版(図6)にはなく、また再版(図7)にはあらわれる。

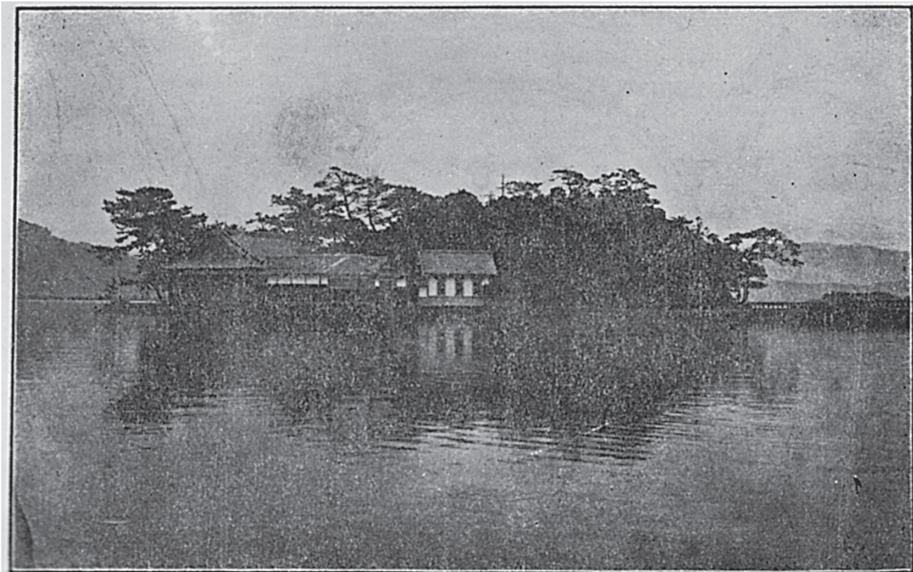
従って、奥座敷の増築はこれらの間の時期になされたと見て良い。

9 中山昇三「紀伊国旅の友」、明治32(1899)年。



あしべ屋別荘

図6：あしべ屋広告（初版）



あしべ屋別荘

図7：あしべ屋広告（再版）

5、奥座敷の痕跡

奥座敷と座敷は柱間が985mm内外である。その間に設けられた廊下柱間は約1060mmでやや広いが、座敷東側に廊下に向けて書院が突出しているため、廊下幅が狭まり使いづらい。天井は座敷側から奥座敷側に向けて勾配が下がっており、「3.座敷」と「4.奥座敷」の境に位置する廊下には不自然な納まりが散見される。

奥座敷西側に、現在は座敷から開け閉めして使う押入れがあるが、その柱を観察したところ、明瞭な3つの仕口痕が見つかった。仕口痕の高さは奥座敷の特徴とも言える高欄の高さと符合した(図9)。また押入れの敷居の外側に使われずに残された一本引きの建具溝が見つかった。廊下北奥には雨戸の跡も見つかり、更に廻り込んで現在水回りとなっている北側の部屋の壁に大ぶりの板戸がはめ殺しの状態で残されている(図8)。

以上の内容を整理すると、奥座敷は本来、東・南・西の三方が開放されて廊下と高欄が廻り、北側から廊下に入り出す形式の建物であったと推測される。さらに、以上のような奥座敷の原型を擁する大きな平面構成は妹背山では計画され得ず、奥座敷そのものは他所からの移築であると考えられる。奥座敷と座敷に300mmほどの段差があるのも原型の床高との落差と推測される。

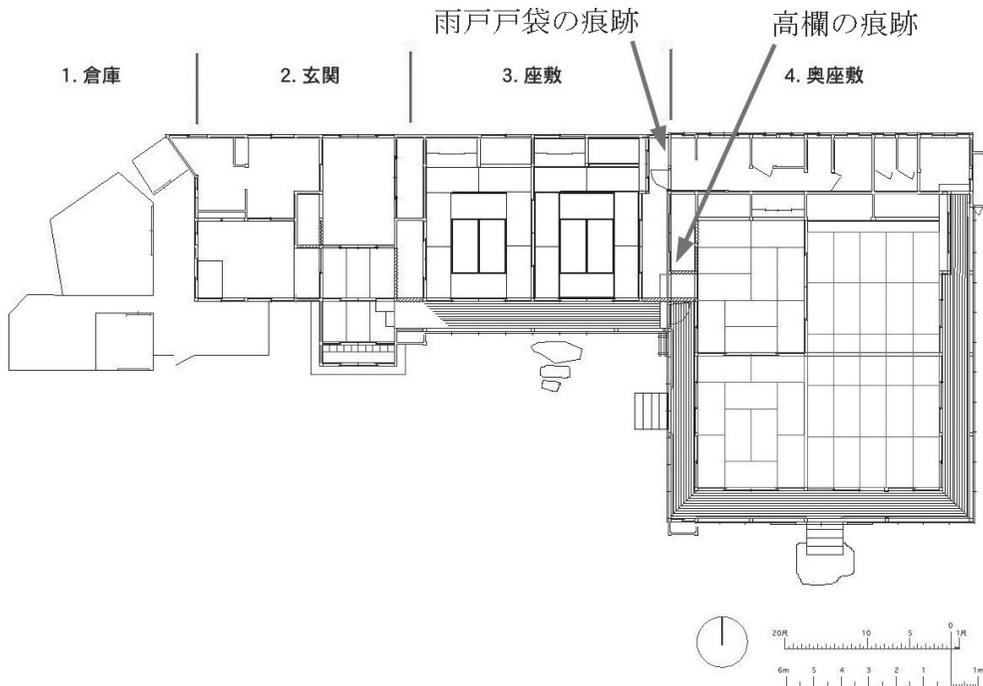


図8：あしべ屋妹背別荘平面図

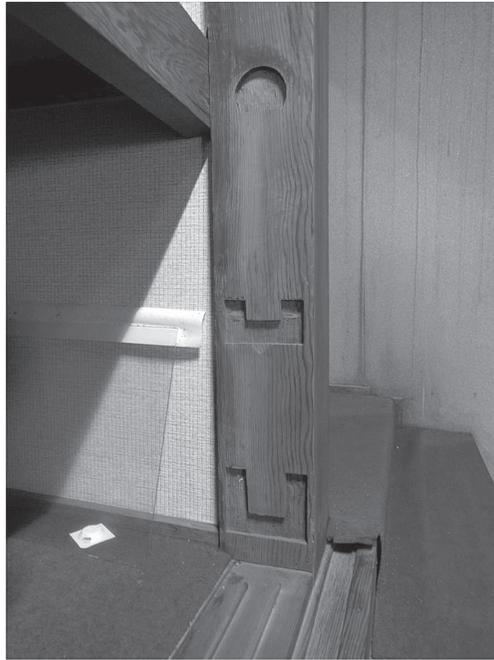


図9：押し入れに残る高欄の痕跡

6、まとめ

今回、「国華余芳」の発見により明治12（1879）年まであしべ屋の姿を遡ることができた。また明治・大正期のガイドブックとあしべ屋当主・藪清一郎の年賀状により、奥座敷が妹背別荘にできた年代を大正2（1913）年から6（1917）年の間と限定することができた。さらに建物の観察を続けて他所から移築された建物であることが判明した。奥座敷は当初はどこに建てられた建物であったか、その建造年代についても興味深いところである。また、旅日記文学により江戸からのあしべ屋の姿へのさらなる遡行の可能性が生まれた。

今後も引き続き史料の渉猟を続けていきたい。

参考文献

西本直子・西本真一「和歌浦『あしべ屋別荘』と夏目漱石」、武蔵野大学環境研究所紀要2、平成25（2013）年、pp.77-93。

西本真一・西本直子「和歌の浦『あしべ屋』の増改築の過程」、武蔵野大学環境研究所紀要3、平成26（2014）年、pp.99-115。

藤本清二郎「和歌の浦百景：古写真でみる『名勝』の歴史」、東方出版、平成5（1993）年。

「和歌山県の昭和史：別冊『一億人の昭和史』」、毎日新聞社、昭和57（1982）年。

益田清「得能良介巡回日記：明治12年文化財歴訪の旅」、私家本、平成8（1996）年。

「伊勢金毘羅道中講定宿帳」、今井金吾監修「道中記集成」43、大空社、平成（1997）年。

佐藤脩亮「丙午紀行」天、私家本、平成4（1922）年。

森川昭「明治七年の旅」、帝京大学文学部紀要「日本文化学」41、平成 22 (2010) 年。
中山昇三「紀伊国旅の友」、明治 32 (1899) 年。
「国華余芳」、国立印刷局、明治 13 (1880) 年。